

了賢撰『他師破決集』 訳注（四）——卷第一ノ四——

別 所 弘 淳

はじめに

『他師破決集』の撰者である侍従僧正了賢（一二七九～一三四七）は、『仁和寺諸院家記』（心蓮院本<sup>1</sup>）には、

了賢僧正 侍従、毛利時賢子、了遍僧正御附法、東寺・仁和寺・大覚寺等学頭、附法八人

と説かれ、また同じく『仁和寺諸院家記』（恵山書写本<sup>2</sup>）には、

了賢僧正 侍従、毛利親宗子、了遍僧正附法、仁和寺・大覚寺等学頭、正安元年十一月十九日、

於菩提院道場、対大僧正了遍受灌頂、色衆八口、教授前大僧正禪助、但別座、貞和三

年 月 日、入滅

と説かれるように、毛利時賢、あるいは毛利親宗の子<sup>3</sup>であり、正安元年（一二九九）に仁和寺菩提院において了遍（一二三四～一三二一）より灌頂を受け、東寺・仁和寺・大覚寺の学頭となった学匠である。

また、その主著『他師破決集』は、『真言宗全書』解題によれば<sup>4</sup>、他宗の諸学匠（徳一・道詮・珍海・最澄・円珍・安然・兼証・淡海三船等）が東密の教義等に対しておこなった疑難を破するための書であり、三十一の条目で構成されている。巻二の奥書には、「元徳三年正月日、依<sup>二</sup>大覚寺殿仰<sup>一</sup>注<sup>三</sup>進之<sup>一</sup>。法印権大僧都了賢<sup>5</sup>」と記され、また、巻五の奥書には、「正慶元年五月日、依<sup>二</sup>大覚寺殿仰<sup>一</sup>注<sup>三</sup>進之<sup>一</sup>／法印権大僧都了賢<sup>6</sup>」とある通り、元徳三年（一一三三）、正慶元年（一一三三）の頃に「大覚寺殿<sup>7</sup>」の仰せによって撰述されたものである。

『他師破決集』は、先行研究では、主に徳一の『真言宗未決文』に対する反駁書として取り扱われているが、それ以外の諸学匠に対する反駁が扱われた論考はほとんどなく、または部分的に取り上げられるのみであり、了賢や『他師破決集』自体を扱った研究は全くないといっても過言ではない。

そこで『他師破決集』の全体像を把握することを目的とし、訳注研究を行うこととした。この訳注において用いるのは、「承応二年刊本」を底本、「仁和寺藏古写本」を対校本とした、『真言宗全書』巻二一所収本である。

凡例

- 一、本稿は、了賢撰『他師破決集』の【原文】に、【訓読】・【典拠】・【解説】を施したものである。
- 二、【原文】は、詳細な【解説】を施すことができるように、条目を更に細かく区切ることにした。尚、【訓読】を表記しているため、【原文】に返り点を付すことはしなかった。
- 三、条目には、『真言宗全書』解題（二二七頁上～二二八頁上）にしたがって通番号を付した。巻第一ノ四に収録される条目は次の通り。
- 五、大日経結集者誰人耶事
- 四、【原文】については、いわゆる異体字の類も含め、原則として通行の字体に改めた。また踊り字も元の字体に改めた。中略を示す「○」については【原文】【訓読】ともに「……（中略）……」と表記した。
- 五、【訓読】は、通読の便を考慮し、文意に応じて適宜改行し、段落を設けた。漢字は原則として通行

の字体を用いた。また書名は原則として『』で囲い、引用文も「」で囲った。また割注にはへゝを付した。

六、【典拠】における主要引用文献の略号は以下の通り。

『大正新脩大藏経』↓大正、『弘法大師全集』↓弘全

『大日本仏教全書』↓仏全、『真言宗全書』↓真全

七、【解説】は、関連する事柄について言及しながらも、できる限り現代語訳することに努めた。

### 訳注研究

#### 五、大日経結集者誰人耶事

#### 【原文】

智証疏鈔云、又此経我聞、或言、金剛薩埵之我聞非阿難之我者、此説未詳。私謂、毘盧遮那、對於声聞。

何言非阿難我乎。今示明文。仏心経下卷、有毘盧遮那对告阿難之文。煩故不具引。既有对告之文。何故非阿難之我耶（但世学者、未見此文。守株費見而已）。

【訓読】

智証①の『疏鈔』に云く、「又此の経の「我聞」は、或が言く、金剛薩埵の我聞にして阿難の我に非ずとは、此の説未だ詳らかならず。私に謂く、毘盧遮那、声聞に対す。何ぞ阿難の我に非ずと言わんや。今明文を示さん。『仏心経』②下卷に、「毘盧遮那阿難に対告す」の文有り。煩わしき故に具さに引かず。既に対告の文有り。何が故ぞ阿難の我に非ざるや（但し世の学者、未だ此の文を見ず。株を守り見るに費す而已）と文り。

【典故】

- (1) 智証の『疏鈔』…智証大師円珍（八一四～八九二）撰『大日経疏抄』（仏全二六・六七六頁下）
- (2) 『仏心経』…菩提流志訳『仏心経』卷下（大正一九・八頁下～九頁上）に、「爾時阿難、於其悶中、心有二少省一。強自意持、即起レ問盧遮那言、世尊、其此光者、唯説二諸仏一耶。仏言、是善男子、唯仏能知。雖有二菩薩一、未レ同二仏見一。其時阿難、前礼二仏足一、五体投レ地眼中垂レ涙、以レ偈問曰、……（中略）……爾時毘盧遮那仏、於光明中出二大音声一、歎二阿難一言、善哉仏子、……（以下略）」

とあることの取意か。ただし、本文割註に記される通り、この『仏心経』の中に「毘盧遮那对告阿難」の文は見られない。

### 【解説】

本条目は、『大日経』卷一の冒頭「如是我聞」の「我」が誰を指すのかということの問題としたものである。ここでは、この問題を提起するにあたり、円珍撰『大日経疏鈔』を引用する。この引用文において円珍は、『大日経』の「我」が金剛薩埵であり、阿難ではない」とする説に疑義を唱えている。そして『仏心経』に「毘盧遮那が阿難に対告する」という文があることを指摘し、『大日経』の「我」も阿難であると主張している。

ただし、【典拠】においても指摘したように、「毘盧遮那对告阿難」の文は、『大正新脩大藏経』所収の菩提流志訳『仏心経』には見られない。

### 【原文】

徳一未決云、疑云、大毘盧遮那経初云如是我聞。今疑。此経釈迦如来滅後八百年時、毘盧遮那、自对普賢・執金剛手等而説。爾時阿難・迦葉久已滅度。誰言我聞。若言竜樹菩薩結集者不爾。後従毘盧遮那口伝普賢・

從普賢口伝竜樹。如何竜樹称我聞。若言普賢我聞者不爾。普賢菩薩非二乘凡夫肉眼所能見。如何交雜人間結集<sup>文</sup>。

【訓読】

徳一<sup>①</sup>の『未決』に云く、「疑いて云く、『大毘盧遮那経』の初めに「如是我聞」と云う。今疑う。此の経は釈迦如来滅後八百年の時、毘盧遮那、自ら普賢・執金剛手等に対して説く。爾時に阿難・迦葉は久しく已に滅度す。誰か「我聞」と言わん。若し竜樹菩薩結集すと言わば爾らず。後に毘盧遮那より普賢に口伝し、普賢より竜樹に口伝す。如何ぞ竜樹の「我聞」と称せん。若し普賢の我聞と言わば爾らず。普賢菩薩は二乗凡夫の肉眼の能く見る所に非ず。如何ぞ人間に交雜して結集せん」と文り。

【典拠】

(1) 徳一の『未決』…徳一撰『真言宗未決文』（大正七七・八六三頁上）

【解説】

本条目における問題を提起する文として、円珍の著作に続き、徳一撰『真言宗未決文』の「結集者疑」を引用している。

この文では、釈迦滅後八百年後に、毘盧遮那が普賢・執金剛手等に対して説いた『大日経』に「我聞」とあることに対し、この「我」が誰であるのかと問うている。釈迦滅後八百年であるため、阿難・迦葉はすでに滅している。竜樹（竜猛）・普賢（金剛薩埵）であっても難がある。密教の伝授は「毘盧遮那↓普賢↓竜樹」と口伝えられている。竜樹は、毘盧遮那より直接伝えられていないため、竜樹が「我」であることはない。また、二乗凡夫の見るところでない普賢が、人間のいる結集の場で「我聞」といえるはずがない、という疑義である。

### 【原文】

問。大日経誰人結集耶。

答。高祖大師作三重積。初重積意、判金剛薩埵結集也。

### 【訓読】

問う。『大日経』は誰人の結集ぞや。

答う。高祖大師は三重の積を作したまう。初重の積の意は、金剛薩埵の結集と判するなり。

【典拠】

(1) 三重の釈・伝空海撰『秘藏記』（弘全二・四二頁）に、「結集。修多羅藏<sup>阿</sup>、毘尼耶藏<sup>後跋</sup>、阿毘達摩藏<sup>延施</sup>、般若藏<sup>殊文</sup>、秘密藏<sup>賢</sup>。是守護国界經所説。又顕教中説云、仏滅度後、普賢・文殊菩薩、率<sup>二</sup>阿難<sup>一</sup>於<sup>二</sup>鉄圍間<sup>一</sup>結<sup>二</sup>集諸經<sup>一</sup>。是則総。守護国界經諸説別耳」とあることを指すか。本条目の後半部分（紙面の都合上、次回の訳注で扱う予定である）には、本条目作成の際に参考にしたとされる經典・論書等が引用されている（便宜上「資料編」とする）が、この『秘藏記』の文も、「資料編」の中に見ることができるものである。ただし、この『秘藏記』の文は、顕教の説を「総」、『守護国界經』の説を「別」とした、総・別の二説であり、本文中にある「三重の釈」と符合しない。なお、本文中には『守護国界經』とあるが、実際には『大乘理趣六波羅蜜多經』卷一（大正八・八六八頁下）に、「復次慈氏我滅度後、令<sup>下</sup>阿難陀受<sup>二</sup>持所<sup>レ</sup>説素咀纒藏<sup>一</sup>、其<sup>下</sup>波離受<sup>二</sup>持所<sup>レ</sup>説毘奈耶藏<sup>一</sup>。迦多衍那受<sup>二</sup>持所<sup>レ</sup>説阿毘達摩藏<sup>一</sup>、曼殊室利菩薩受<sup>二</sup>持所<sup>レ</sup>説大乘般若波羅蜜多<sup>一</sup>。其金剛手菩薩受<sup>中</sup>持所<sup>レ</sup>説甚深微妙諸総持門<sup>上</sup>とあることに基づいた解釈であることが報告されている（勝又俊教編『弘法大師著作全集』卷二、山喜房仏書林・一九七〇、等）。

【解説】

本条目の初重の問答である。問者は「『大日經』は誰が結集したのか」（『大日經』の「我」は誰か）と問

い、答者は、「空海が三重（二重の誤りか）の釈を示す中、初重の釈は金剛薩埵の結集であると判じている」（「我」は金剛薩埵である）と答えている。

### 【原文】

難云、御答爾。今就之、金剛薩埵雖対告衆、未為結集者。阿難依得多聞總持之惠故、如来囑之令結集一代諸經。縱雖今經、同可為阿難結集也。是以智証大師、破薩埵結集成阿難結集義。爾者難思。如何。

### 【訓読】

難じて云く、御答爾なり。今これに就いて、金剛薩埵は対告衆なりと雖も、未だ結集者と為さず。阿難は多聞總持の恵を得たるに依るが故に、如来はこれに囑して一代諸經を結集せしむ。縦い今經なりと雖も、同じく阿難の結集と為すべきなり。是を以て智証大師は、薩埵の結集を破して阿難結集の義を成ず。爾らば思い難し。如何。

### 【典拠】

(1) 智証大師…前注に示した、智証大師円珍撰『大日経疏抄』（仏全二六・六七六頁下）を指す。

【解説】

初重の問答を受けての第二重の質問である。問者は、金剛薩埵は対告衆ではあるが結集者（『大日経』「我聞」の「我」）ではなく、阿難こそが結集者であるとする。なぜならば、阿難は仏の教説を多く聞き、またそれを亡失しない智慧を得ているため、如来は阿難に付嘱して、諸経を結集させたと言った。したがって、『大日経』も、他の經典と同様に阿難の結集とするべきであると主張するのである。その根拠として、先に触れた円珍『大日経疏鈔』を提示している。

【原文】

答。顕・密教主各別、宗旨又不同也。於生身所説者雖阿難結集、至密教者阿難非伝持之人。又遥隔見聞。争結集之。金剛薩埵対大日受灌頂、又相承其法。結集流伝尤当其器。是以聖位経、大日親付属此教於薩埵。六度経、受持陀羅尼藏於普賢。普賢・薩埵同体異名也。晨旦人師、以六度経受持為結集証拠。明知。非阿難結集也。智証大師猶不出顕網故作破文。尤不可聞。

【訓読】

答う。顕・密の教主各別にして、宗旨又不同なり。生身の所説に於いては阿難結集すと雖も、密教に至りては阿難は伝持の人に非ず。又遙かに見聞を隔つ。争でかこれを結集せん。金剛薩埵は大日に対して灌頂を受け、又其の法を相承す。結集流伝尤も其の器に当たれり。是を以て『聖位經』には、大日親たり此の教を薩埵に付属すと。『六度經』には、陀羅尼藏を普賢に受持せしむと。普賢・薩埵は同体異名なり。晨旦<sup>④</sup>の人師、『六度經』の受持を以て結集の証拠と為す。明らかに知んぬ。阿難の結集に非ざるなり。智証大師は猶お顕綱を出でざるが故に破文を作す。尤も聞くべからず。

### 【典拠】

(1) 生身の所説… 釈尊所説の顕教のこと。

(2) 『聖位經』… 『略述金剛頂瑜伽分別聖位修証法門』(大正一八・二八八頁中)に、「爾時金剛界毘盧遮那仏、在<sub>二</sub>色界頂阿迦尼吒天宮<sub>一</sub>、初受用身成<sub>二</sub>等正覺<sub>一</sub>、証<sub>二</sub>得一切如来平等智<sub>一</sub>。即入<sub>二</sub>一切如来金剛平等智印三昧耶<sub>一</sub>、即証<sub>二</sub>一切如来法平等自性光明智藏<sub>一</sub>、成<sub>二</sub>等正覺<sub>一</sub>已。一切如来、從<sub>二</sub>薩埵金剛<sub>一</sub>出<sub>二</sub>虚空藏大摩尼宝<sub>一</sub>、以灌<sub>二</sub>其頂<sub>一</sub>、令<sub>下</sub>發<sub>二</sub>生觀自在法王智<sub>一</sub>、安<sub>二</sub>一切如来毘首羯磨善巧智<sub>一</sub>、往<sub>中</sub>詣須弥山頂金剛摩尼宝峯樓閣<sub>上</sub>、集<sub>二</sub>聖衆<sub>一</sub>已」とあることを指すか。

(3) 『六度經』… 『大乘理趣六波羅蜜多經』卷二(大正八・八七二頁中)に、「爾時普賢菩薩摩訶薩、即從<sub>レ</sub>座起、偏袒右肩、右膝著<sub>レ</sub>地合掌恭敬。而白<sub>レ</sub>仏言、大聖世尊、我亦為<sub>レ</sub>欲<sub>下</sub>擁<sub>中</sub>護国界及受<sub>二</sub>持此經典<sub>一</sub>者<sub>上</sub>、

常作<sup>二</sup>守護<sup>一</sup>。為<sup>レ</sup>欲<sup>三</sup>滌<sup>二</sup>除障難<sup>一</sup>、說<sup>二</sup>陀羅尼秘密文句<sup>一</sup>」とあることを指すか。

（4）晨旦の人師…詳細不明。

【解説】

第二重の質問を受けての回答である。答者は、顕教の教主である釈迦の所説は、阿難が結集者であるが、密教では阿難は伝持の人ではないとする。また、徳一の言うように、『大日経』が説かれた時、阿難はすでに滅しているため、大日の教説を見聞することはできないとする。

それに対して、金剛薩埵であれば、大日如来より灌頂を受けて密教を相承したため、結集流伝に最も適した者であるとする。この証拠として、『分別聖位経』に「大日如来が金剛薩埵に教を付嘱した」とある記述、『六波羅蜜経』に「普賢に陀羅尼蔵を受持させる」という記述を提示している。そのうえで、晨旦の人師（詳細不明）が、この『六波羅蜜経』の記述を結集の根拠としていると主張し、結集者は阿難ではなく金剛薩埵であると決択している。

【原文】

一。阿難、発得三昧故結集未聞之経。何況涅槃經中出八種徳之内、有了知秘密之徳。縦雖此経、於結集

者阿難主其德故。結集更無妨者歟。

会云、密藏異常教、不入灌頂壇者、敢不可聞之。於一代顯教者雖結集未聞之經、於密藏者非其境界。争聞之。是以正法念經說三藏阿難、阿含經說典藏阿難。雖然無出秘密阿難。是尤為誠証歟。於了知秘密之德者、解釋尊所說陀羅尼故出此德歟。孔雀經對阿難說之。是有解秘密之德故也。大日・釈迦各別之上者不足准例者哉。

【訓読】

一。阿難、三昧を發得するが故に未聞の經を結集す。何に況んや『涅槃經』の中に八種の德を出だす内に、了知秘密の德有り。縦い此の經なりと雖も、結集に於いては阿難其の德を主るが故に。結集更に妨げ無きものか。

会して云く、密藏は常教に異なりて、灌頂壇に入らざれば、敢えてこれを聞くべからず。一代顯教に於いては未聞の經を結集すと雖も、密藏に於いては其の境界に非ず。争でかこれを聞かん。是を以て『正法念經』に三藏の阿難を説き、『阿含經』に典藏の阿難を説く。然りと雖も秘密の阿難を出だすこと無し。是れ尤も誠証たるか。了知秘密の德に於いては、釈尊所說の陀羅尼を解するが故に此の德を出だすか。『孔雀經』は阿難に対してこれを説く。是れ解秘密の德有るが故なり。大日・釈迦各別の上は准例するに足らざるものか。

【典故】

(1) 『涅槃經』：慧嚴訳『大般涅槃經』（南本）卷三六（大正二・八四九頁下～八五〇頁上）に、「文殊師利、阿難事<sub>レ</sub>我二十餘年、具<sub>二</sub>足八種不可思議<sub>一</sub>。何等為<sub>レ</sub>八。一者事<sub>レ</sub>我已來二十餘年、初不<sub>三</sub>我受<sub>二</sub>別請食<sub>一</sub>。二者事<sub>レ</sub>我已來、初不<sub>レ</sub>受<sub>二</sub>我陳故衣服<sub>一</sub>。三者自<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>我來、至<sub>二</sub>我所<sub>一</sub>時、終不<sub>二</sub>非時<sub>一</sub>。四者自<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>我來、具<sub>二</sub>足煩惱<sub>一</sub>、隨<sub>二</sub>我入<sub>二</sub>出諸王・刹利・豪貴・大姓<sub>一</sub>、見<sub>二</sub>諸女人及天童女<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>生<sub>二</sub>欲心<sub>一</sub>。五者自<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>我來、持<sub>二</sub>我所説十二部經<sub>一</sub>、一經<sub>二</sub>於耳<sub>一</sub>曾不<sub>二</sub>再問<sub>一</sub>。如<sub>下</sub>写<sub>二</sub>瓶水<sub>一</sub>置中<sub>一</sub>之<sub>二</sub>瓶<sub>上</sub>。唯除<sub>二</sub>一問<sub>一</sub>。……（中略）……六者自<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>我來、雖<sub>レ</sub>未<sub>三</sub>獲<sub>二</sub>得知他心智<sub>一</sub>、常知<sub>二</sub>如来所入諸定<sub>一</sub>。七者自<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>我來、未<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>願智<sub>一</sub>、而能了<sub>下</sub>知<sub>レ</sub>是衆生到<sub>二</sub>如来所<sub>一</sub>、現在能得<sub>二</sub>四沙門果<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>後得者<sub>一</sub>、有<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>人身<sub>一</sub>、有<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>天身<sub>一</sub>。八者自<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>我來、如来所有秘密之言悉能了知。善男子、阿難比丘具<sub>二</sub>足如<sub>レ</sub>是八不思議<sub>一</sub>。是故、我称<sub>二</sub>阿難比丘<sub>一</sub>為<sub>二</sub>多聞藏<sub>一</sub>」として八種の不可思議を出だす中の八番目に、「如来の所有秘密の言を悉く能く了知す」として、秘密を了知する徳を挙げてゐる。

(2) 『正法念經』・『正法念処經』（大正一七・七二番）や、『正法念經』と称される『仏説分別善惡所起經』（大正一七・七二九番）に、「三蔵の阿難」の記述は見られない。これは、智顛『法華文句』卷一上（大正三四・四頁上）に、「正法念經明<sub>三</sub>阿難<sub>一</sub>。阿難陀、此<sub>二</sub>云<sub>一</sub>歡喜」。持<sub>二</sub>小乘藏<sub>一</sub>。阿難跋陀、此<sub>二</sub>云<sub>一</sub>

歡喜賢<sup>一</sup>。受<sup>二</sup>持雜藏<sup>一</sup>。阿難娑伽、此云歡喜海<sup>一</sup>。持<sup>二</sup>仏藏<sup>一</sup>とあることの孫引きと考えられる。ここでは、『正法念經』の説として、小乘藏(阿難陀)・雜藏(阿難跋陀)・仏藏(阿難娑伽)の三藏の阿難が示されている。

(3) 『阿含經』…前注と同様、智顛『法華文句』卷一上(大正三四・四頁上)に「阿含經有<sup>二</sup>典藏阿難<sup>一</sup>。持<sup>二</sup>菩薩藏<sup>一</sup>」とあることの孫引きと考えられる。

(4) 『孔雀經』…不空訳『仏母大孔雀明王經』卷上(大正一九・四一六頁中)に、「爾時、仏告<sup>二</sup>阿難陀<sup>一</sup>、我有<sup>二</sup>摩訶摩瑜利仏母明王大陀羅尼<sup>一</sup>。……(中略)……汝持<sup>二</sup>我此仏母明王陀羅尼<sup>一</sup>、為<sup>二</sup>莎底苾芻<sup>一</sup>而作<sup>二</sup>救護<sup>一</sup>」と、仏が阿難に対して仏母明王陀羅尼を説いたことを指す。

#### 【解説】

これより以降は、前の問答に付随する問答である。付随の問答は全部で六つあるが、うち四つ目のみは問答形式で記されていない。

問者は、『涅槃經』に説かれる、阿難が具足した八不思議の中、「如来の所有秘密の言を悉く能く了知す」という徳を挙げ、「この秘密を了知する徳を阿難は具足しているため、未聞の教を結集することができた」と説き、結集者が阿難であると主張している。

これに対して答者は、『大日經』が密教經典であることを重要視する。すなわち、密教は顯教とは異なり、

灌頂を受けることなくして聴聞することはできないとする。したがって、阿難は密教經典を結集することはできないとする。この証拠として、『正法念經』・『阿含經』を挙げる（ただし、『正法念經』・『阿含經』の説は『法華文句』の孫引きである）。『正法念經』には「小乘藏・雜藏・仏藏」の三藏の阿難が説かれ、『阿含經』には「典藏（菩薩藏）」の阿難が説かれるが、秘密の阿難（密教の阿難）は説かれていないとする。そして、『涅槃經』の「秘密了知の徳」は釈尊の説いた陀羅尼を理解したことを指すとし、その例として、『孔雀經』の、釈尊が阿難に「摩訶摩瑜利仏母明王大陀羅尼」を説いたことを挙げ、この『孔雀經』の陀羅尼を阿難が理解したことが、『涅槃經』に言うところの「了知秘密の徳」であるとする。

なお、この答者の回答の最後に「大日・釈迦各別の上は准例するに足らざるものか」とある。本書には、本条目以前に「釈迦外有大日別体否事」という条目があり、ここでは大日と釈迦が同体であるか、別体であるかが議論されている。『他師破決集』における了賢の見解は大日・釈迦は別体であるというものであり、この見解が、他の条目（本条目）にも反映されているといえる。

【原文】

一。智証破意、仏心經中、大日対告阿難。然者何不結集耶。  
会云、仏心經者高祖御請来也。高祖所立争違彼。是以正披經文、阿難、於大日者光明猶以不知本末、亦

大日、讓親承於積尊。非阿難之境界之条勿論也。智証難破、頗非理尽歟。

【訓読】

一。智証の破意は、『<sup>①</sup>仏心経』の中に、大日、阿難に対告す。然らば何んが結集せざらんや。会して云く、『<sup>②</sup>仏心経』は高祖の御请来なり。高祖の所立争でか彼に違せん。是を以て正しく<sup>③</sup>経文を披くに、阿難、大日に於いては光明猶お以て本末を知らず、亦た大日、親承を積尊に讓る。阿難の境界に非ざるの条勿論なり。智証の難破、頗る理尽に非ざるか。

【典故】

(1) 『<sup>①</sup>仏心経』・円珍『大日経疏鈔』(弘全二六・六七六頁下)の中で指摘される『<sup>②</sup>仏心経』の説を指す。なお、前述の通り、『<sup>③</sup>仏心経』の中に「毘盧遮那对告阿難」の文は見られない。

(2) 高祖の御请来…空海『御将来目錄』(弘全一・八五頁)に、

仏心経二卷

不空罽索真言経二卷

第六卷第二十卷  
三十卷之中闕本

右二部三(四)卷菩提留支三藏訳

とあることを指す。※( )内は『弘全』の註、ならびに『大正』による。

(3) 經文…『仏心經』卷下（大正一九・八頁下～九頁上）に、「爾時阿難、於其悶中、心有少省。強自意持、即起問盧遮那言、世尊、其此光者、唯說諸仏耶。仏言、是善男子、唯仏能知。雖有菩薩、未同仏見。其時阿難、前礼仏足、五体投地眼中垂淚、以偈問曰、……（中略）……爾時毘盧遮那仏、於光明中出大音声、歎阿難言、善哉仏子、……（中略）……阿難、白仏言、世尊如是。菩薩猶故不知。一切衆生、云何得解此理。仏言、汝我此親承第七仏釈迦牟尼。次当宣說。一切衆生自然得了解。能奉持者、一切衆生自然得解我之所說。爾時阿難、即問釈迦牟尼言、世尊此事云何。我自親承供養已、經劫數。唯願為我示現。及諸法要、我欲修行、流注衆生心際。爾時如来、告阿難言、阿難、我今示現如是神力」とあることを指す。

【解説】

本条目に付随する問答の二つ目。問者は、円珍が『仏心經』に「大日が阿難に対告する」とあることを根拠に阿難の結集としている。

それに対して答者は、『仏心經』は空海の将来であり、この經文を見るならば、阿難は光明中の大日の音声を聞くのみで姿を目の当たりにはしておらず、また大日は、阿難への説教を釈尊に譲っているため、阿難が結集者ではないと主張している。

【原文】

一。慈覚意、於結集有主・伴。阿難通一切結集之。於初契經為主、於後四藏者伴也。謂契經阿難、毘尼優婆離、対法迦旃延、般若文殊、陀羅尼金剛手、各為主結集之。仍於密教者、金剛手者主、阿難者伴也。東寺學者、多以依用此義。阿難結集強不可遮之歟。是以大師秘藏記中、於結集作総・別。総者阿難、別者金剛手等五人也。然者高祖御意同慈覚義歟。

会云、凡密教意、伝持付属之人、可結集之。達其法門故也。顕教意、付属人者迦葉、結集者阿難云云。其義不理尽歟。仍総以阿難為結集者者、顕教未尽之義、五人各別作結集者、密藏尽理之義故也。総・別義則顕・密意也。異慈覚所判。阿難非総通結集顕・密故。対密教所判五人各別之結集、一代顕教総通阿難結集故云総也。秘藏記文、能能可見之。慈覚顕・密兼学人師故、不出顕教域作此定判歟。東寺輩、同此義深迷高祖深義者歟。

【訓読】

一。慈覚の意は、結集に於いて主・伴有り。阿難は一切に通じてこれを結集す。初めの契經に於いては主と為し、後の四藏に於いては伴なり。謂く契經は阿難、毘尼は優婆離、対法は迦旃延、般若は文殊、

陀羅尼は金剛手、各の主と為してこれを結集す。仍て密教に於いては、金剛手は主、阿難は伴なり。東寺の学者、多く以て此の義を依用す。阿難の結集、強ちにこれを遮すべからざるか。是を以て大師『秘藏記』の中に、結集に於いて総・別を作す。総は阿難、別は金剛手等の五人なり。然らば高祖の御意は慈覚の義に同じきか。

会して云く、凡そ密教の意は、伝持付属の人、これを結集すべし。其の法門に達するが故なり。顕教の意は、付属人は迦葉、結集者は阿難なりと云云。其の義理尽にあらざるか。仍て総じて阿難を以て結集者と為すは、顕教未尽の義、五人各別に結集を為すは、密藏尽理の義の故なり。総・別の義は則ち顕・密の意なり。慈覚の所判に異なれり。阿難は総通じて顕・密を結集するに非ざるが故に。密教所判の五人各別の結集に対して、一代顕教総通じて阿難結集の故に総と云うなり。『秘藏記』の文、能く能くこれを見るべし。慈覚は顕・密兼学の人師なるが故に、顕教の域を出でずして此の定判を作すか。東寺の輩、此の義に同ぜば深く高祖の深義に迷う者か。

【典拠】

(1) 慈覚の意…慈覚大師円仁（七九四～八六四）撰『金剛頂経疏』卷一（大正六一・二二頁下）に、「問。今於此経称我聞者、是為誰我。若云阿難我者、今此経、是諸如来秘密一乘、非諸三乘等類境界。如何得称阿難之我。若云非阿難我者、是為誰我耶。答。仏於六波羅蜜經中、

収<sub>二</sub>撰法宝<sub>二</sub>以為<sub>三</sub>五分<sub>一</sub>。一素咀纒、二毘奈耶、三阿毘達摩、四般若波羅蜜多、五陀羅尼門。而  
拳<sub>二</sub>五人<sub>一</sub>以為<sub>レ</sub>度。滅後伝教者、謂阿難、鄔波離、迦多衍那、曼殊室利菩薩、金剛手菩薩。如<sub>レ</sub>次  
令<sub>三</sub>各受<sub>二</sub>持<sub>一</sub>一藏<sub>一</sub>。若依<sub>二</sub>此義<sub>一</sub>、応<sub>レ</sub>云<sub>二</sub>金剛手之我聞<sub>一</sub>也。依<sub>二</sub>結集伴<sub>一</sub>者、義通<sub>二</sub>阿難<sub>一</sub>。智論  
第一百云、仏滅度後、文殊尸梨、弥勒、諸大菩薩、亦將<sub>二</sub>阿難<sub>一</sub>集<sub>二</sub>是摩訶衍<sub>一</sub>。是故義亦通也」と  
あることを指す。この文では、金剛手を主、阿難を伴として、阿難が一切の結集に通ずるとの解  
釈を示している。

(2) 『秘藏記』…伝空海撰『秘藏記』(弘全二・四一頁)に、「結集。修多羅藏<sub>阿難</sub>、毘尼耶藏<sub>優波</sub>、阿毘達摩藏<sub>延勝</sub>、般若藏<sub>殊文</sub>、秘密藏<sub>賢普</sub>。是守護国界經所説。又顕教中説云、仏滅度後、普賢・文殊菩薩、率<sub>二</sub>阿  
難<sub>一</sub>於<sub>二</sub>鉄囲間<sub>一</sub>結<sub>二</sub>集諸經<sub>一</sub>。是則総。守護国界經諸説別耳」とあることを指す。ここでは、顕教  
の説を「総」、『守護国界經』の説を「別」とした、総・別の説を挙げている。

### 【解説】

本条目に付随する問答の三つ目。問者は、慈覚大師円仁の見解として、結集には主と伴とがあるとの  
解釈を出だす。すなわち、経は阿難、律は優婆離、阿毘達摩は迦旃延、般若は文殊、陀羅尼は金剛手が  
結集の主であり、律・阿毘達摩・般若・陀羅尼については、阿難は結集の伴であるとする。つまり、密  
教では金剛手が結集の主、阿難が結集の伴であるとする。

そして、この説を東寺の学者（東寺に限るのか、広く東密を指すのかは不明）は依用することが多いとし、阿難の結集をあながちに遮すべきではないとする。まして『秘蔵記』には、結集に総・別の解釈を用い、阿難を総、金剛手等の五人を別としている。これによれば、（伝統的に空海の撰述と考えられてきた）『秘蔵記』の説は円仁のものと同じなのではないか、と主張する。

この難に対し、答者は、密教はその法門に達した伝持・付属の人が結集すべきであるとする。顕教では付属の人を迦葉、結集者を阿難とするのであり、顕・密は相違するとしている。したがって、『秘蔵記』において阿難を総として結集者とするのは顕教の義であり、五人を各別とするのは密教の義であるとす。すなわち、『秘蔵記』の総・別の釈は、顕教・密教の意であり、阿難が顕・密に通じて結集したのではないとする。したがって、『秘蔵記』の説と円仁の主・伴の義とは異なるものであると主張する。

『秘蔵記』の解釈は、結集を密教的に解釈した五人各別の結集（別）と、釈迦一代の顕教を阿難が総じて結集したこと（総）を表明した、顕・密の結集の相違を指摘したものであると説き、問者の難に反論している。

【原文】

一、智証意、約法界通開義阿難結集無妨云云。慈覺・安然等意大略同之。阿難、或在釈迦院、或在外壇云云。

【訓読】

一、智証<sup>①</sup>の意は、法界通開の義に約せば阿難の結集妨げなし<sup>云云</sup>。慈覚・安然等の意、大略これに同じ。阿難、或いは釈迦<sup>③</sup>院に在り、或いは外壇<sup>④</sup>に在り<sup>云云</sup>。

【典拠】

- (1) 智証の意：円珍『大日経疏鈔』（仏全二六・六七六頁上〜下）に、「如是我聞者、約<sup>①</sup>已開門<sup>②</sup>為<sup>③</sup>阿難我<sup>④</sup>。若爾阿難非<sup>⑤</sup>大日侍者<sup>⑥</sup>、何称<sup>⑦</sup>我聞<sup>⑧</sup>。阿闍梨云、約<sup>⑨</sup>法界通開義<sup>⑩</sup>、無<sup>⑪</sup>其妨難<sup>⑫</sup>」とあることを指す。
- (2) 慈覚・安然等の意：慈覚の意とは、円仁『金剛頂経疏』巻一（大正六一・二二頁下）のことを指す（前註参照）。安然の意とは、五大院安然撰『教時間答』巻二（大正七五・四〇七頁下）に、「問。伝法菩薩誰耶。答。若約<sup>①</sup>結集主<sup>②</sup>者、是金剛手。若約<sup>③</sup>結集伴<sup>④</sup>者、亦通<sup>⑤</sup>阿難<sup>⑥</sup>也。問。何以知<sup>⑦</sup>之。答。金剛頂疏云、……（以下略）」とあることを指す。
- (3) 釈迦院：現図胎藏曼荼羅釈迦院に阿難が画かれることを指す。
- (4) 外壇：『金剛頂瑜伽中略出念誦經』巻三（大正二八・二四一頁上）において曼荼羅を画く中、「其金剛阿闍梨、応<sup>①</sup>思<sup>②</sup>惟是等及餘<sup>③</sup>置<sup>④</sup>外壇中<sup>⑤</sup>。毘盧遮那等諸天、止<sup>⑥</sup>住欲界<sup>⑦</sup>者、意樂<sup>⑧</sup>調<sup>⑨</sup>伏煩惱<sup>⑩</sup>者、及舍利弗等無量諸比丘來詣者、皆思<sup>⑪</sup>惟之<sup>⑫</sup>」と説くことを指す。すなわち、舍利弗等の諸比丘（阿

難も含まれると考えられる）が外壇に画かれることが説かれている。ただし、現図金剛界曼荼羅には画かれない。

【解説】

本条目に付随する文。ここでは、円珍の説を、法界があらゆるところに通じていて開かれているという観点より述べれば密教についても阿難の結集といっても妨げられるものではないとする。また、円仁・安然の説は、ともに結集に主・伴があるとするものでおおむね同義であるとする。そして、阿難が胎蔵曼荼羅では釈迦院に画かれ、『略出念誦経』の曼荼羅では外壇に画かれていることを出だしている。ここで曼荼羅を問題とするのは、曼荼羅が「法界通開の義」を表現したものであるためと考えられる。

【原文】

一、曼荼羅聖衆互融會。阿難何不結集乎。

会云、凡於法門者、有横平等・豎差別二義。約平等門者、十界皆毘盧己体也。不可有顯・密不同。約差別門者、四重円壇非無高・下差異。今論結集者、縁起差別門也。何約顯・密通開義談之。慈覺等不出顯網故、以一理平等為宗。仍頻述顯・密一致之旨。東寺意、以即事而真為宗故、約豎差別論之。若強立此

義者、外部人は六道凡夫也。彼同可見聞密教耶。義門頗乖角歟。

【訓読】

一、曼荼羅の聖衆互いに融会す。阿難何ぞ結集せざらんや。

会して云く、凡そ法門に於いては、横平等・豎差別の二義有り。平等門に約せば、十界皆な毘盧の己体なり。顕・密の不同有るべからず。差別門に約せば、四重円壇に高・下の差異無きに非ず。今結集を論ずるは、縁起差別門なり。何ぞ顕・密通開の義に約してこれを談ぜん。慈覚等は顕網を出でざるが故に、一理平等を以て宗と為す。仍て頻りに顕・密一致の旨を述べ。東寺の意は、即事而真<sup>①</sup>を以て宗と為すが故に、豎差別に約してこれを論ず。若し強いて此の義を立つれば、外部の人は是れ六道の凡夫なり。彼れ同じく密教を見聞すべきや。義門頗る乖角<sup>②</sup>するか。

【典拠】

(1) 即事而真…差別のある現象世界の物事がそのまま真理であるということ。ここでは、顕・密を一理平等(横平等)の観点より論じる円仁等の天台学僧に対し、東密が横平等のみならず、豎差別の観点からも論じることができるといふことを、「即事而真」の語を用いることで示し、東密の優位性を論じている。

(2) 乖角…「乖」はそむく、「角」はあらず。人に無理難題を言う、食い違ふの意。

【解説】

本条目に付随する問答の五つ目。おそらく、前の文の曼荼羅の説を受けての問答であると考えられる。問者は、曼荼羅諸尊・聖衆は互いに融会しているのだから、曼荼羅に阿難が画かれている以上、阿難を結集者とすることに問題はないのではないかと質問する。

これに対して答者は、密教には横平等・豎差別の二義があるとする。横平等の観点よりすれば、十界はすべて毘盧遮那の体であり、そこに顕・密の不同はないとする。ただし、もう一方の豎差別の観点では、四重円壇（曼荼羅）に高下という段階を設ける考え方をしないわけではないとする。今の結集者の議論は、豎差別の観点より論じているため、顕・密が通じていて開かれているという横平等の観点から断じてはいけないとする。

円仁等の天台の学僧たちは、顕・密が一理平等であることを旨とするが、これは顕・密一致の旨を述べるためであるとする。対して東寺（東寺教学のみを指すのか、広く東密を指すのかは不明）の見解は、即事而真（差別のある現象世界の物事がそのまま真理である）という義を旨とするため、結集に関しても豎差別の観点より論ずるとする。結集を横平等の観点のみから述べてしまったら、外金剛部に画かれるのは六道凡夫であるのだから、この者たちが密教を見聞することになってしまい、密教の義と食い違つてし

まうと説いている。

【原文】

一、徳一破意、就結集有三種破。一者、時節不同故非阿難。二者、第三代祖故非竜樹。三者、世間・出世間相隔故非普賢也。云云。

会云、初二種破違所立之上者、非会通之限。第三破者於塔中結集之。破文不可当。義訣註塔中事云、經夾広長如床。云云。 結集經卷、在塔内之条勿論也。但流布十万頌經者、竜猛入塔中、一見憶持出塔外記之。約根本定金剛手結集也。

【訓読】

一、徳一<sup>①</sup>の破意は、結集に就きて三種の破有り。一には、時節不同の故に阿難に非ず。二には、第三代の祖の故に竜樹に非ず。三には、世間・出世間相隔の故に普賢に非ざるなりと。云云。

会して云く、初めの二種の破は所立に違うの上は、会通の限りに非ず。第三の破は塔中に於いてこれを結集す。破文当たるべからず。『義訣』に塔中の事を註して云く、「経夾広長床のごとし」と。云云。 結集の経巻、塔内に在るの条勿論なり。但し流布せる十万頌の経とは、竜猛の塔中に入り、一見憶持して塔

外に出でてこれを記す。根本に約して金剛手の結集と定むなり。

【典拠】

- (1) 徳一の破意…徳一『真言宗未決文』の「結集者疑」（大正七七・八六三頁上）を指す。  
(2) 『義訣』…『金剛頂大瑜伽秘密心地法門義訣』卷上（大正三九・八〇八頁上）。

【解説】

本条目に付随する問答の六つ目。問者は、徳一の『真言宗未決文』「結集者疑」の文が三種の破を示しているとする。一つは、釈迦滅後八百年という時節が阿難の結集に当たらないとする説。二つは、「大日↓金剛薩埵（普賢）↓竜猛」という付法の順であるため、大日と隔たっている竜猛は結集者ではないという説、三つは、二乗凡夫の見る所でない普賢が、人間のいる結集の場で「我聞」といえるはずがないという説である。

この徳一の難に対して答者は、初めの二つは指摘の通りであるとして会通不要の立場をとる。対して、第三の説（普賢〈金剛薩埵〉は結集者ではないとする説）については、南天铁塔中における結集であるため、「普賢は二乗凡夫が見聞できない」という難は当たらないとする。その根拠として『金剛頂経義訣』に、铁塔内の状況を「経が広大な大きさであった」と説かれていることから、結集して書かれた経巻が塔中

にあることは明白であるとする。そして、竜猛が塔中に入ってその経を目の当たりにし、憶持して塔外で記したものが、流布せる經典であるとする。したがって、塔内に経が存在したという観点から金剛手（金剛薩埵）の結集であると定めるのであるとする。

註

- 1 『仁和寺史料』「寺誌編一」二二二頁（吉川弘文館・二〇一三）。
  - 2 『仁和寺史料』「寺誌編一」三三八頁（吉川弘文館・二〇一三）。
  - 3 この「毛利時賢」と「毛利親宗」が如何なる人物であるのかは不明であり、同一人物であるのかも不明である。尚、了賢の事績等については『密教大辞典』や『真言宗全書』解題「著者略伝」（三三三九頁上〜三四〇頁上）に詳しい。
  - 4 『真言宗全書』解題（二二六頁下〜二二九頁下）。
  - 5 『他師破決集』卷二（真全二・二五八頁上）。
  - 6 『他師破決集』卷五（真全二・三〇八頁下）。
  - 7 『真言宗全書』解題では、「大覚寺殿」を「性円親王敷」と推測している（二二九頁上）。
- 〈キーワード〉了賢、『他師破決集』、徳一、『真言宗未決文』、結集者